

ふ、く、ふ、く かねら版

医療・介護・福祉コミュニケーション情報誌

麻生教育サービス株式会社 URL <http://www.aso-education.co.jp/>



Report ①

高齢社会の課題解決に向けた 国際的取組み

— 第10回アジア太平洋アクティブエイジング会議 in 福岡 (ACAP2016福岡大会)

Report ②

平成27年度 コンパクトなまちづくりセミナー

「人口減少下において持続可能な 都市であるために」

2016
VOL. 97

AES
ASO EDUCATION SERVICE CO.,LTD

高齢社会の課題解決に向けた国際的取組み

第10回アジア太平洋アクティブエイジング会議 in 福岡(ACAP2016 福岡大会)

去る3月5・6日の2日間、福岡国際会議場にて行われた福岡市主催の「第10回アジア太平洋アクティブエイジング会議 in 福岡(ACAP2016 福岡大会)」。10年前に第1回が福岡市で開催されて以来、着実に歩みを進め、記念すべき第10回を同じく福岡市で迎えました。先進国を中心に世界中で進む高齢化に対応する取組みをレポートします。

世界各国の研究者が一堂に会して知識を共有

10年前の第1回大会は日本、アメリカ(ハワイ)、韓国、中国の4カ国のみに参加だったものが、今回はアジアを中心に10以上の国と地域から参加がありました。また日本各地の研究者も参加して、今後重要なテーマとなる「アクティブ・エイジング」について活動報告や討議を重ねました。

最初に行われた開会式ではACAPの代表でハワイより来福したキャサリン・ブラウン氏が挨拶に立ち、ア



ACAP代表のキャサリン・ブラウン氏

トスピーチとして、福岡市をはじめ各国の研究者が研究成果や活動内容を報告。また午後から翌6日午前中にかけては3つ



ACAP2016推進会議議長の小川全夫氏

のシンポジウムが開催され、それぞれパネリストが自国での取組みを紹介した後、意見を交換しました。ひとくちに高齢化と言っても直面する課題はさまざまであり、その解

決手法も多岐にわたっています。高齢社会におけるICTの活用、介護分野における人材育成・人材交流、地域コミュニティにおける高齢化問題の取組みなど、どのシンポジウムも重要な課題について熱心に討議され、会場からの質疑応答も行われました。



アクセンチュア(株)マネジングディレクターの武内和久氏

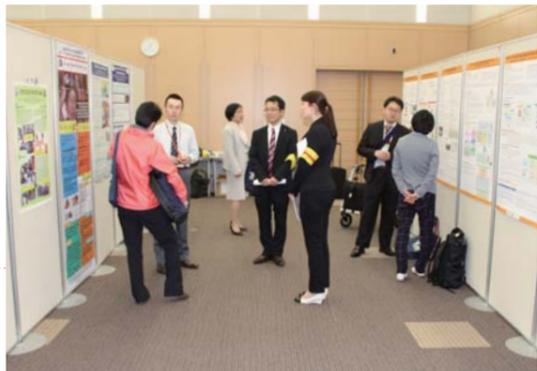
ていくのか世界各国から注目を集めています。その指針となるべく、人口減少社会を念頭に置いた日本の保健医療に関する取組みをまとめた提言書が「保健医療2035」です。

シンポジウムでは最初に塩崎恭久厚生労働大臣が開会挨拶に立ちました。その後、提言書の作成にも関わった元厚労省勤務で、現在はアクセンチュア株式会社マネジングディレクターの武内和久氏が基調講演。続くパネルディスカッションでは行政や大学の教授が参加して、大都市が抱える問題やアジアとの交流の活発化について意見交換を行いました。

ワールドカフェ方式のワークショップも初開催

今回初めての試みとして6日午後から行なわれたのがワールドカフェ方式

のワークショップ。各国からの参加者が3つのテーマに分かれ、テーブルを囲みながらフランクに意見交換しました。堅苦しいシンポジウム形式とは違い、それぞれの考えを直接話せる場でもあり、ユニークなアイデアも多く出ていたようです。また意見交換をする中で自分たちの置かれていた状況を理解したり、新たなヒントを得ることもできました。



ポスターセッション

プで出た意見やアイデアを代表者が発表。全員で共有しました。続いてポスターセッションの審査が行なわれ、優秀な団体には記念品と賞が贈られました。入賞団体には今回初参加となったタイからの代表者も含まれていました。さらに「ACAP2016 福岡宣言」として、第10回を記念する宣言を採択。世界各地からたくさん参加者が集い、熱心な討議が行なわれたACAP2016 福岡大会は大盛況のうちに幕を閉じました。

このほか2日間を通じて行われたのがポスターセッション。56の団体が参加し、それぞれの取組みをポスター形式で発表しました。大会中にはポスターの前で担当者に熱心に質問する光景も見られました。またランチセミナーとして日本での介護技術についての解説も行われ、参加者たちの注目を集めていました。

2日間の最後の締めくくりでは、まずワールドカフェ方式のワークショップ



ポスター発表の優秀受賞者



ACAP2016福岡大会の参加者

世界の手本となるべき我が国の「保健医療2035」

本大会と同時開催されたのが厚生労働省主催の「保健医療2035シンポジウム」です。すでに65歳以上人口が全人口の25%を超えている日本は、今後どのような社会をつくり、体制を整え

医療と介護のトータルヘルスケア

【挑戦】白十字は、**肌**にやさしくなれるか。

高温多湿で、アルカリ性に傾きやすいおむつの中。これが、ムレやカブレの原因のひとつです。おむつ内環境の改善を目指す白十字にとって、なんとしても克服したい問題でした。この難題に取り組んだのは、ブランドマネージャーの田中大樹。「おむつ内のpH値を調整し、肌と同じ弱酸性に保てれば、肌トラブルは減るはずだ」。試行錯誤を繰り返し完成したのが弱酸性のサルバ。心地よいのがあたり前の紙おむつへ。挑戦は続きます。

医療から生まれた思いやり

サルバ

www.hakujuji.co.jp/salva/

「人口減少下において持続可能な都市であるために」

去る平成28年2月15日、福岡県飯塚市のイイヅカコミュニティセンターにおいて行われた「コンパクトなまちづくりセミナー」。人口減少下にある日本において、とりわけ厳しい状況が予想される地方都市での今後を考える取り組みです。

まずは基調講演として、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長(併)内閣府地方創生推進室次長である伊藤明子氏による「地方創生とこれからのまちづくり」が講演されました。人口が減少し、少子高齢化が進む



内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局次長(併)内閣府 地方創生推進室次長

伊藤 明子氏

日本で、国はどのようなビジョンを描き、地方創生をどう推進していくのか。各地方での具体的事例なども交えながら解説するとともに、今後さらに重要となるであろう「コンパクトシティ」の考え方についても説明がありました。

続いて特別講演として、東京大学高齢社会総合研究機構特任教授の辻哲夫氏が「地域包括ケアとまち

づくり」と題して講演を行ないました。地域包括ケアは、超高齢社会を迎える日本において今後推進していくべき重要な取組みです。医療・予防・介護・生活支援・住まいが一体と



東京大学 高齢社会総合研究機構 特任教授

辻 哲夫氏

なった地域包括ケアシステムについて、現状の課題とともに今後のあるべき姿を説明していただきました。とりわけ辻氏が深く関わっている千葉県柏市での先進的な事例は、地方でも実現可能性の高い具体的な取組みだと考えられます。

辻氏は最後のまとめとして「政策のパラダイム転換が必要」と述べるとともに、「次世代なき超高齢社会は持続できない」とも考えています。超高齢社会の



モデルは地方でつくられ、大都市圏に移行される可能性もあると見解を述べていました。

編集後記

新年度がスタートしました。通勤中の電車でも、新入社員と思われるフレッシュな若者を見ると、昔の自分を思い出し、身の引き締まる思いです。

さて、今回紙面で特集したACAP2016福岡大会。私もスタッフとして参加させていただきました。世界各国の研究者が一同に会し、取り組みや知識を共有する会議を、地元の福岡で開催することができたことを誇りに感じました。高齢化進展の状況は、各国それぞれで異なりますが、歳を取るということは世界共通です。高齢化は、どの国にも待たなしで訪れます。高齢化の「先進国」である日本の取り組みを世界に発信していくことは、経済支援や人道支援と並ぶ大きな国際貢献と考えます。人材確保や処遇改善など課題の多い日本の介護ですが、国際社会から参考とされる「KAIGO」となれるよう、一丸となって取り組んでいきたいものです。と言っても特別なことをする必要はありません。出来ることから一つずつ取り組んで行きましょう。私もまずは「英会話」から始めたいと思います。

それでは、スティーブ・ジョブズさんの一言です。「人生には限りがあります。本当に大事なことを本当に一生懸命できる機会は、2つか3つくらいしかないのです。」



麻生教育サービス株式会社
医療福祉事業部
人材育成支援課 教務主任

田口 幹生